

淀川のシンボルフィッシュ、 イタセンパラをとおして健全な河川環境を考える

いつの頃からか、イタセンパラは淀川のシンボルフィッシュとよばれるようになった。本種には、文化庁から「国の天然記念物（種指定）」、環境省からレッドデータブック掲載種「絶滅危惧1A類」、さらには、“種の保存法”にもとづく「国内希少野生動植物種」と、物々しい肩書きが並ぶ。つまり、イタセンパラは、この地球上から永遠に姿を消す危機に直面している淡水魚の一種なのである。

イタセンパラは日本固有の淡水魚で、成魚になっても体長が10cmにも満たないタナゴの仲間である。生きた淡水二枚貝の体内に産卵するというのが、タナゴに共通した面白い習性なのだが、イタセンパラはコイ科としては珍しく、産卵期は秋季である。したがって、仔魚は新緑の季節に泳ぎ出すまで、実に半年以上もの期間を二枚貝の中で過ごすという、極めて特異な習性をもっている。本種の分布域は富山平野と濃尾平野、そして淀川水系である。いずれの地域でも人間活動による生息環境の消滅や悪化によって危機的な生息状況にあるが、現在、比較的まとまった個体数の生息がみられるのは、何と大阪市内の淀川である。

1996年6月、当時の環境庁・文部省・農林水産省・建設省の4省庁によって「イタセンパラ保護増殖事業計画」が官報告示され、行政機関の主導による本格的な保護活動が始まった。行政間の連携による本事業計画の策定は、従来にはない画期的なものであり、自然保護に対する行政の意気込みを感じさせる。

本事業は、イタセンパラが自然状態で安定的に存続できる状態になることを目標とし、その内容は、①生息状況等の把握・モニタリング、②生息地における生息環境の維持・改善、③飼育繁殖に向けた取り組み、④その他として、密漁の防止や移入種による影響への対策、普及啓発の推進等、多岐にわたる。

しかし、行政機関がこれらの事業を永続的に、かつ、実りのあるものにしていくうえで最も大切なのは、地元で調査・研究、保護活動を行っている個人、あるいは団体との密接な連携である。淀川には、1970年代初頭より自然保護活動に関わってきた研究者やナチュラリスト、(財)淡水魚保護協会（1994年に解散）や日本生態学会などの組織があった。淀川水系イタセンパラ研究会（以下、研究会）は、このような、



ドブガイに産卵しようとするイタセンパラのつがい(左:雌、右:雄)

古くから淀川の自然保護に携わってきた人々が中心になって1996年11月に発足した。

会員は、河川生態学や河川工学の研究者をはじめ、学校教育関係者、水族館、博物館の学芸員、文化財の専門家などの社会教育に携わる関係者で構成されている。研究会が主催する勉強会や会議では、「イタセンパラ保護増殖事業計画」の推進にあたって、行政機関やコンサルタントの担当者も交え、多角的な視点から具体的施策についての活発な意見交換を行なっている。また、生息状況把握のための現地調査をはじめ、保護啓発用リーフレットの作成や講演会、シンポジウムなどの機会を通じての啓発活動についても力を入れている。研究会が目指すのは、イタセンパラという生物種のみでの保存ではなく、あくまでも本種を健全な河川環境のシンボルとして位置づけることで、本種を含む河川生態系全体の保全を図ることである。

イタセンパラの主生息地である淀川は、1971年から約30年間続いた河川改修工事によって河川環境の著しい衰退を招き、イタセンパラの危機的な状況をつくりだした。国土交通省が今春策定する河川整備計画は、今後20～30年の淀川のありかたを決定する大計画である。この計画の遂行によって再びイタセンパラが生きいきと遊泳する河川生態系が淀川に復元されることを願ってやまない。

(環境省 希少野生動植物種保存推進員 河合典彦)

2003年度大阪信愛女学院短期大学公開講座「環境総合研究所講座」ご案内

第1回 5月31日(土)「環境と健康—環境中の化学物質の危険性—」

国際医薬品臨床開発研究所理事 菊池 康基 氏

第2回 10月26日(土)「淀川の水環境を考える—水生生物の視点から—」

環境省希少野生動植物種保存推進員 河合 典彦 氏

第3回 11月 9日(土)「日本のウミガメと砂浜、そして人間との関わり合い」

NPO法人日本ウミガメ協議会会長 亀崎 直樹 氏

開催時間：午後2時30分～4時／開催場所：本学鶴見学舎。第2回のみ大阪府立文化情報センター（中央区大手前）

／申込み：往復葉書に「住所・氏名・年齢・電話番号・1講座名」を明記の上、大阪信愛女学院短期大学公開講座係（TEL 06-6180-1041）